



耳元で感じたやすらぎ

こいずみ こ
【古泉 サト子・徳島県】

男性の息が和らぐのが分かった。私の肩にもたれて眠っている70歳代の男性は、がんを患い大学病院で治療を受けていたが、車を運転すると疲れるようになり、地元の総合病院に通院するようになった。がんはすでに肺や骨に転移していた。胸水によって呼吸がしづらくなったため入院し、2、3日おきに胸水を抜くようになった。700ミリリットルくらい抜くと楽になり、その夜はよく眠れていた。

胸水は抜いてもすぐにたまり、楽に過ごせる時間が短くなってきた。管を入れ続けて、抜くようになってからも、息苦しさで倦怠（けんたい）感が強かった。使い始めたモルヒネが速く効いてくれますようにと祈った。

男性は横向きになったりオーバーテーブルにもたれたりして、楽な体勢を見つけようとしていた。家族は脇腹から出ている太い管や血性の胸水を見て、近寄れずにいた。私は男性の左隣に座った。男性の上体を引き寄せてみたものの、正直なところ楽にさせてあげられる自信はなかった。ところが引き寄せるやいなや、私の肩に男性がもたれてくれた。「いかり肩で、しかも肉付きが薄くてすみません」と心で謝った。やがて男性は眠り始めた。前に傾くと私も前のめりになり、左右に揺れるとそれに合わせて動いたため体勢が崩れることはなかった。私は33年前のある光景を思い出しながら、男性の息遣いに気を配っていた。

私の父は胃がんで亡くなった。私が高校生の時で、家から一番近い病院に入院していたが、なかなか面会に行けなかった。たまに行っても少し離れたところに座っていた。鎮痛剤を頻回に注射するようになってきたある日、病室のドアを開けると、父が11歳年上の私の姉に寄りかかって、座ったまま眠っていた。

患者さんが苦しい時、あの日の姉のように患者さんに直接寄り添いたいと思っていた。ずっとできずにいたが、看護師になって25年目に初めて行えた。

「誰か看護師さんと代わろうよ」。息子さんの言葉が静かに耳に入ってきた。